

どれみなのはなし

そのじゅういち



このひチヨコのひ

シヤコッ シヤコッ シヤコッ

台所ののれん上げたら、小気味ええ音と一緒に、甘い匂いがふわぁ、とやってきたわ。

「へえ、ええ匂いやなあ」

テーブルの前には、水色のナプキン三角巾にした、あたしの娘。一所懸命ボールの中をかきまぜてる手が、ずいぶん大きくなったように見えるわ。

「あいこも、お菓子なんて作るようになったんやね」
ふう、て息ついて、おでこタオルでぬぐってから、おっきなおでこが振り向いた。

「5年生のときは、お菓子屋さん手伝ってたって、まえに言ったやん」

ああ、そう言えば、そないなこと言ってたなあ。

「それに」

「それに？」

あたしが目え覗き込んだら、

「これはまた別や。東京に行ってから、バレンタインには毎年作ってるからな」

そう言うてる顔が、えらい大人びてるわ。ちよい上の方、遠く見るような目えして ああ、そっか。

「あいこ」

「ん？ なんや、おかあちゃん？」

「東京に、好きな男の子おるんやね？」

きよとん、て顔しとるわ。あたしやつたら気づかへんとも思ってるんかなあ？

「4年も前からずうつと想ってるん？ おかあちゃん悲しなあ。なんで言うてくれへんの」

目えがまんまるに開いた思たら、あいこの顔が真っ赤になったわ。

「ちやうちやう、ちやうて。これはそないなチヨコやない!!」

あーあ、ヘラ持つてる手えぶんぶん振り回すから、
チヨコがそこら飛んでもうてるやないの。

手えからヘラ取って、そこらついたチヨコ拭いて
たら、あいこが両手握り締めてこっち向いた。

「これは、はづきちゃんや。誕生日がちょうど2月
の14日やから」

ああ、なんや。友達の方がいな。そやけど

「ずいぶんはよから作るんやねえ。バレンタインま
で、まだ一週間もあるやないの？」

聞きながら返したヘラ、うちわがわりに扇いでる
わ。ふふふ。よっぽど慌ててたんやね。

「アメリカのももちゃんかてケーキ送る言うてるん
やで？ 同じ日本にいるあたしが間に合わへんなん
て、よう言われへん。どわあっ！ チヨコがさ
めて固まっしてもたッ!!

あーあ、やりなおしやあ

ぶつぶつ言いながら、湯せんに使ってた鍋をまた
火にかけてる。あたしは笑わんように後ろ向いて、台

所出て行った。

そやけどなあ。いくら誕生日いうたかて、バレン
タインデーにチヨコあげる相手が女の子、か。ほん
まは、もつと一緒に遊びたいんやろな。

うん、そやね。ちょっとお父ちゃん、つつい
てみよか。

「なんやて!!」

あたしは思わず素っ頓狂すったんきょうな声上げてしもた。

「なんやって、見てわからんか？」

おとうちゃん、半分ふくれっ面でこっち見とん。

三日がかりのチヨコ作りがやっと終わって、箱ど
ないしよかなー思いながら夕飯の手伝いしとったと
きやった。

おとうちゃんが、ただいまも言わんと台所来て、あ
たしになんやプレゼントがある、言い出したんや。

目の前に出されたんは、新幹線のきつぷ。新大阪から東京までの。

「いや、そやけど、ちよ、ちよい待ちや。こない高価なもん、なんで？」

「たまにはええやないの。あんまりお父ちゃんばかにしたらあかんぞ」

いつの間にかおかあちゃんが、あたしの両肩に手え置いてるわ。

「そつや。俺の稼ぎやとちよいちよいは無理やけど、たまにもやれん、ちゆうわけやないぞ。チヨコくらい、直接持ってったりや」

おとつちゃんがあたしの手に、きつぷをぎゅっと押し込んで、そのまま所出てこうとしてん。おかあちゃんが背中ぼんぼん、て叩くから、わけわからんまま、大声でおおきに言うて受け取ったけど

手の中のきつぷ、裏つ返したり透かしたりしてもなんもあらへん。いったい、なんやったんや？

「ここんとこ、ず〜っとチヨコ作ってんやでーって

お父ちゃんに毎日言つといたんよ」

背中でおかあちゃんがこそこそ言つてる。振り向いたら口に指あてて、静かにしい、って形や。

「そんでな、今朝そわそわし出したから言つてみたんや。『東京やったら14日は藤原さんの誕生日や言つてたなあ。けど、今年は行かれへんし、誰にあげるんやるなあ？』て」

へ？

「そしたら、きつぷ買ってくるから、言つてでかけてんで。もつ、かわいいなあ♡」

居間に聞こえんように、くすくす笑てん。はあ、負けたわ。ほんま。

「へえ、MAHO堂に泊まるんだ」

むかしは魔女界につながってたどびら。マジヨモンローの写真見ながら、わたしはそのとびらによつ

かかって、背中からくる大阪弁聞いてた。

「せや。きつぷが結構しよったからなあ。まあ、お
かあちゃんたちには、どれみちゃんとお泊めてもら
う、て言うといだけど」

とびらのむこうは、大阪のMAHO堂 に、な
るはずだったとこ。むかし、マジョリードさんが作っ
たんだ、って言うってたな。あいちゃん。

「このとびらが開くんやったら、そっちの——アメリ
カのMAHO堂にかて楽々行けるんやけどなあ。ま、
そらぜいたくつちゆうもんやろ」

あいちゃんの声が、苦笑いしてる。そだね。

とびらのむこうに届くのは声だけ。開けて、むこ
うには行けない。でも、もともとは声も届かないは
ずなんだから、

「お泊り、かア」

それ以上は望んじやいけないよ。うん。

「あ、そや。前から聞きたかったんやけど。あた
しらの誕生日のたんびにケーキ送ってきてるやんか。

うれしいけど、ももちゃん大変やないの？」

あ、いきなり別の話題。お泊り、いいなあ、っ
て思ったの、声に出ちやっただかな？

ケーキね、ケーキ。まあ、そっか。年に4回も
送ってたら、大変って思うかもね。でも、

「えへへ。実はネ、約束なんだヨ」

「約束？」

あはは。やっぱり、わかんないか。それじゃ、

「ウン。実はネ、このMAHO堂は、なくなるハズ
だったんだヨ」

「なんやて!？」

そんなに驚かないでよ。大阪にMAHO堂がある
ことのほうが、よっぽどびっくりなんだから。

「バナラさんに言われたノ。だからわたシ、頼んだ
んだヨ。もう入れなくてもいいカラ、せめてお店だ
けは残して」って。そしたら、ひとつ約束すれバ、消
さなくてもイイって言うてくれたノ」

わたしは、細いネックレスの先をにぎった。このM

AHO堂のカギ。白く光ってる、わたしだけのカギ。

「それが、ケーキなんか?」

「ソウ。このMAHO堂月に一度、思いを込めて、お菓子を作るコト。これが、パニラさんとの約束だヨ」

「そっかぁ って、ちよい待ちや?」

ん?どつしたんだろ、おかしな声出して。

「あたしらの誕生日 ももちゃん合わせたかて5回やる?あと7回どないするんや??」

ああ、そっか。

「それはネ 適当に、作っちゃった♡」

「て、適当やて?」

パパにママにベスに アメリカの友だち全部合わせても、うまく毎月にはならないもんね。

「あまったところは、好きな魔女さんの誕生日ツテことにしちゃったノ♡マジヨモンローとか、リリカおばあちゃんトカ、マジヨリカとか きゃあ!!」

「な、なんや?どないしてん!?!」

パソコン! シャンシャン! ゴンツ!!

いたい、いたい、いたってば!

キッチンに片付けといた料理の道具、いきなり飛んでくるんだからなあ、もう。

「おい、ももちゃん! だいじょぶか?」

ああ、いけない。いけない。

わたしは、まわりをひよいひよい飛び回ってる、ボールや泡だて器やめん棒を全部かかえこんで、またとびらによっかかった。

「とりあえず、平気イ あはは、忘れてたヨ」

「なんや、いつたい?」

ボールがバタバタ暴れてる。もう。みんなまとめて、とびらに押し付けちゃえ!

「このMAHO堂つて、マジヨモンローの思いがものスゴク残ってるんだって。だからネ、ズルすると怒るんだヨ」

泡だて器とめん棒が、ぐいぐい押しきてる。しょ

うがないなあ。

「あいちゃん、ちょっと待ってて。バツゲームしてくるカラ」

「はあ？ なんや、それ??」

背中にあいちゃんの声聞きながら、わたしはキツチンの方にひっぱられて行った。怒られたらお菓子の修行、これも約束だもんね。

今日の怒りかただと、んゝ　パイ3個くらい作らなきゃ、ダメかな？

「ええっ？ あいちゃんMAHO堂泊まるの!?!」

あかん。思わず吹いてもった。

罰ゲームとか言つて、ももちゃんいなくなつてもうてから20分。学校行こ思てたところへどれみちゃんが来たんで、バレンタインの話してみたら、これや。

まったく、とびら越して大阪と美空町と離れてる

んに、目えまんまるに開けた顔が浮かんでくるわ。

「まあ急な話やし、みんなんとこ押しかけるンもなあ。

そこやつたら遠慮せんといられるし、それに」

あたしは言いながら、とびらを右手でコンコン、って叩いた。

「夜には、ももちゃんともずつと話できるしな」

「あはは。面白いネ。いいヨ、待ってル」

ああ、ももちゃん、戻ってたんか。

「えゝ、あいちゃんずるゝい！ よし。だったらあたしも泊まるっ！」

へ？

「待ってて。おんぶちゃんとはづきちちゃんにも声かけてくるから」

ちよ、ちよっちよっちよい!!

「ちよい待ちやあッ!」

思つきし大声出したら、向ここの足音が止まった。

ふっ。あぶないあぶない。

「耳いたいイ」

あちゃ、せやった。どれみちゃんだけやのうて、も
もちゃんも聞いてるんやったわ。

「ごめんなあ　せやけど、やつぱひとりで泊まる
わ。だいたい、とびらの前に3人も4人も寝られへ
んやる?」

あ、どれみちゃん、むくれた声出してるわ。しょあ
ないなあ。

「それにや、どれみちゃん。おんぶちゃんはまあえ
えとして、はづきちゃんはあかんやる」

「へ?なんで??」

わけがわからん、ちゅう声が帰ってきたんで、あた
しはちよい頭痛いたなった。　幼なじみちゃうんかい。

「あたしが泊まる日はバレンタインデーやんかあ。
いっくら大親友いうたかて、あたしもまた馬に蹴ら
れたない」

「わたしなら、別にかまわないわよ?」
んあ、この声?

「は、はづきちゃん　!?!」

どれみちゃんの声がビクビクしてん。あたしも、も
もちゃんも、いきなり黙ってもった。

去年のクリスマス、カレン女学院のパーティーで矢
田くんとカッブル組ませる計画に、あたしら乗って
もったからなあ。

あとで聞いたら、一年生で男子と一緒に参加した
ん、はづきちゃんたちだけやってみたいや。

「みんなのおかげで、3学期になってからもずーっ
とからかわれてるなんて、わたしちつとも気にして
ないのよ♡」

うあ、あかん。とびらがあるのに、はづきちゃん
のめがねが光ってるんわかるわ。

「と、と、とにかくあたしはひとりで泊まるから
あ、もう学校行かんと。ほな!」

どれみちゃんの『逃げるな』ちゅう声が聞こえ
るけど、気にしてられへんわ。くわばら、くわばら。

あいちゃんの声がなくなってからも、わたしはそのまま座って、耳を澄ましてた。

とびらのむこうは、しばらくボソボソ、ゴソゴソって音。それがピタッとやんだと思ったら、はづきちゃんの声が聞こえてきた。

「ねえ、ももちゃん。まだいる？」

「う、うん、いるヨオ」

なんかこわい。たくらんでる声だわ。

「じゃあね、ちよつとお願いがあるんだけど。」

どれみちゃん、逃げないの！

続けて『うわっ』っていう声。どれみちゃんの声だわ。つかまったのかな？

「あのね、ももちゃん。あいちゃんが美空町に来るのって、13日の夜なのよ。だから、そのとき」

ふんふん。 え？ ええっ！

わたしは、ちよつと言葉につまっちゃった。

「は、はづきちゃん？ ちよつと性格、変わったんじゃないナイ？」

「うふふ♡ きたえてくれたの、誰かしら？」

あゝあ。もう、笑うしかないわ。ずっと向こうからはどれみちゃんの、乾いた笑いも聞こえてる。

「協力して、ね？ それじゃ」

そのまま学校に行く二人の足音聞きながら、わたしは思わず吹き出しちゃった。

あはははは、まあ、いつか。それにしても、

「わたし、日本にいらなくてよかった」

「はいOK！ おんぶちゃん、15分休憩です」

「はあい」

ふう、写真撮影はたいへん。歌やお芝居の方が、動けるから楽でいいわ。

15分か。ちよつと、横になるのかな？

控え室に入って、バッグの中をチラッと見たら、携帯がチカチカ光ってる。メールかあ　寝たいんだけどな。

誰からだろ？あ、どれみちゃんだ。

はづきちゃんのバースデイの話かしら？　14日はお昼前からお仕事なのよね　あいちゃんもいないし、今年はプレゼントだけにしようと思ってたんだけど　まあいいわ。とにかく、読みましょ。

あら？　あいちゃん来るんだ。13日の夜からMAHO堂にお泊りかあ。みんなでお泊りなんて、ひさしぶりね　って、え!?

「ひとりでお泊まって、ももちゃんと夜通し話すですってえ!？」

いけない。思わず声に出しちゃった。そつと廊下見たけど、だれもいない。ふう。

でも　あいちゃん、時差のことちゃんとわかってるのかしら??

2月13日。学校終わってから家に帰って、おじいちゃんに夕ご飯作って　おかあちゃんは、ええから言ってくれたけど、これはゆずれへん。

それから新幹線と普通の電車乗り継いで、美空駅からMAHO堂までてくてく歩ってるころには、もうすっかり夜中やった。

「お、あいたあいた」

古い店のとびらに金色のカギ入れたら、すうっと開いてもうた。そら開けるためのカギなんやけど、なんや妙な感じや。

あたしはそのまま中に入って、まわり見渡した。

5年くらい前、どれみちゃんにひきずられて最初に来たときと同じ、明かりつけても薄暗い部屋や。そやけど、テーブルにもイスにもほこりついてへん。

何べん掃除してもほこりだらけになってまう、大阪のMAHO堂とえらい違いやな。　ひよっとし

て、マジヨリードさん、作り方間違えたんとちゃうやるか？

もつと奥に入つてくと、キッチンもトイレもちゃんとある。水はきれいやし、コンロで火も使えるし、どこの明かりかてちゃんつく。

二階ちよい、つと見たら、ここだけはそんなむかしやない。ハナちゃんの部屋がそのまんまになつてゐるわ。

「なんや、このまんま暮らしていけそうやなあ」
キッチンノイスにすわつたら、つい口に出てもうた。ほんま、大阪のMAHO堂とは大違いや。

ぼつと見回してみると、なつかしなあて思つてしまつわ。たった1年なんやけど、ここももう思い出なんやな。

あたしは、プレゼントのチョコだけテーブルに置いて、そのままキッチン出た。なんとなく、あたしのいる場所やないなあ、て思つてしもたから。

キッチンと反対側の、いちばん奥。1年前にハナちゃん見送つた、魔女界につながつてるとびら。

その前にすわり込んで、後ろをコンコンって叩いてたら、不思議な氣いしてきた。大阪から4時間かけてやつと来たつちゅうのに、このすぐむこうは大阪なんやもんなあ。

「んにや、ちやうか」

このむこうは大阪だけやない。アメリカの、ももちゃんともつながつてるんや。こつち行くんは、何時間かけたらええんかわからんわ

ももちゃんが来るんは、こつちの真夜中やるな。ほなメシでも食つて、の〜んびり待とか。

大阪で作つてきたおにぎり食べながら時計見たら、もつ夜の11時過ぎやった。そろそろ、準備せんとあかん。

食べ終わって、「ミカたしてから、あたしは二階のハナちゃんのふとん借りて、とびらの前に戻ってきた。

ほりくさいくらいはしゃあない思ってたけど、とんでもないわ。いま干したばかり、ちゆう感じの、お日さんのおいっぱいや。

きつと、ハナちゃんいつでも来れるように、っしてるとるんやろな。

「ハナちゃん、一晩貸してな」

あたしはふとん抱えたまんま、天井に向かって言うた。明日はええ天気になる、言うてたし。きちんと干して返さな、な。

とびらの前にふとんしいて、カイロつつこんでから、あたしはパジャマに着替えた。

うゝ、東京は寒いなあ。急いでふとんをちよいつとめくって包まると おゝ、わりと暖あったこうなるやん。よっしゃ、これなら朝まで大丈夫や。

「ももちゃん、まだかな？」

とびらのむこう、まだ人の気配があらへんわ。ちよい早かったかな？

ええと、アメリカは日本より14時間遅れてるんやったな。日本がもうじき0時ちゆうことは、アメリカは朝の10時か。もう来てても ン？ あ！

「あつちやあ。アメリカはまだ13日やんか！」

日付けが違ちがうちゆうこと、すっかり忘れてたわ。

ええと、学校終わってから来るとして、午後の3時やと、こつちは 朝の、5時。

「泊り込んで話しよ、ちゆうんは、甘かったみたいやなあ」

思わず口にててもた。あゝあ、ちゃんとそこまで考えるんやったわ

「あたりまえでしょ？」

へ？

すぐ後ろから声がした思たら、ふとんの背中がふわつ、と持ち上がって、なんか入ってきたわ。

「うあひゃ!!」

冷たいんが、背中に張り付いた。背中にびとっ、てくる、この感じ、まさか。

「おんぶちゃん!？」

「きまつてるじゃない。それとも、あいちゃんは誰がふとんに入ってきてても平気なの?」

ん。そら、この声にこの気配でわからんわけないわ。せやけど、

「今日も仕事や聞いてたけど、ちやうんか?」

「そっじゃなかつたら、もうちよつと早く来てるわよ」
えらいツンツンしとんなあ。あたしに、はよ気付け言うてるみたいや あ。

「ひよつとして、こつち来る、いうんを直接言わんかったん、怒つとるん?」

ありや? ため息いてもうた。なんやろ?

「じゃあ訊くけど、なんでこんなとこに、ひとりで寝てるのよ。わたしの家に泊まりに来ればいいのに」

「せやから、ももちゃんがいる思ってたからやて。時間間違えてるてわかつたら」

「わかつてたら、わたしの家に泊まった?」

おんぶちゃんの手が、あたしの腕にぎってる。逃がさへん、ちゅつてるみたいや。

「そ、そらそつ いててててっ!」

「うそばかりついてると、つねるわよ?」

もうつねつとるやんか!!

「で、本当は?」

うあ、怒りながらにっこり笑てるんが見えるような声や。もう、しゃあないなあ。

「とびらのむこう、ももちゃんひとりやで?」

「え?」

はあ おんぶちゃんは「まかせへんわ。

「ももちゃん置いて、だれかン家に泊まり。なんちゅうたら、寂しがるんやないかあ、思てな」

おんぶちゃん、黙つてしもた。片手離して、背中でごそごそやつとんなあ あ?」

「もう14日になつわよね。じゃ、チヨ」あげるわ。口あけて」

いきなり、えらいやさしい声なってる。それといっしょに、口元に手えのびてきたわ。まあ、チヨコで機嫌がよあなってくれるんやったら ほな、あむ。

むぐっ!?!に、苦いっ!

「砂糖ぬきビターチヨコ、作っておいてよかったわ」

「お、おんぶちゃ!?! げふっ」

ああ、チヨコはき出しても、苦くて舌が動かへんわ。げほげほやっとなら、また口になんや押し込まれた。チヨコ!! やけど、こんどのはまともや。ああ、しんどかったあゝ

「どう? ちよっとは反省した?」

反省もなんもあるかい! って、あたしが背中むこうとしたら、押し返されてしもた。

「ねえ、ももちゃんがそんなこと喜ばないの、わかってるでしょ?」

そないなこと、わあってるわ。せやけど

「あいちゃんが楽まなかつたら、みんな楽しくないのよ? だから、会えたら、会えたときに楽しめる

ことしよ。ね?」

せやから、わあってるて。せやけど

「せやけど ももちゃんは、ずっと海のむこうなんやで?」

「だったら、会いに行けばいいじゃない」

へ?

「会いたい、ってほんとに思うなら、わたし月だつて行ってやるわ。何年かけてでも、絶対!」

は、はは、ははははは。

そっか、行ったらええんや。ももちゃんがおるんは同じ地球の上や。いつか行って、思っきり楽しいことしたらええんやわ。

はあ、なんや、一気に疲れてもうた。なんで

こないちから入れてたんややるなあ、あたしは。

「ねえ、わたしはずっと『会いたい』って思ってたのよ。最初に聞きたいことば、わからない?」

がっくりしてるあたしのおなかに、そおつと腕が回ってきた。ああ、そっか。それやっただんか。

「ええと ただいま、で、ええかな？」

おなかに回ってる腕が、きゅっ、てしまったわ。あ、もうカイロなんていらへん。ひさしぶりや、この感じ。

「ん。おかえりなさい♡」

しばらく、わたしはあいちゃん背中から抱いてた。ひさしぶり。とびら越しに声はよく聞いてたけど、やっぱりこっやって触ふれられるって、いいわね。

この、おなかの感触が あら？でも、なんだか以前より

「あたしのからだ、ゴツゴツしてきたやろ？」

「え？あ、え」と

なんて言おうか迷ってたなら、あいちゃん、いきなり笑いだした。

「夏ごろからやけど、いろいろ運動してんねん。入っ

てるわけやないけど、いろんなクラブで、いつしょにやらせてもらってるんや」

さすがあいちゃん。わたしも思わず笑っちゃった。

いろんなクラブでちよつとづつ運動、なんて、専門にやってる人に、にらまれて当然なものね。普通は。

「筋肉おんな、なんて言うアホもおるけどな。保健の先生——あ、ゆき先生と違って、天然やないで？で、その先生が言うてくれたんで、気にせんことにしてるわ」

「なんて言われたの？」

聞きながら、わたしはあいちゃんが運動してる姿を想像してた。

「女の子は、どんだけ運動してもちゃんと丸うなるようにできてんで、てな。せやから、やれるだけやり、言つてたわ」

そう言われて、喜んでるあいちゃんが目に浮かぶわ。あいちゃん、けっこつ『女の子』ってことを気にしてるもの。

「いい先生ね」

「ああ。あたしはほんま、行くとこ行くとこ、ええ人に会ってる気がするわ」

うづん。違うわ。いい人に会ってるんじゃない。

あいちゃんだから、まわりが自然によくなっちゃうのよ。

なんたって、わたしがいま、ここで抱きしめてるくらいだよ♡

「こんどさわるときは、どっなってるかしらね？」

「もつと硬いかもしれへんな」

「もう！ そいうこと言わないの」

ふたりして笑った声が、うす暗いMAHO堂に響いた。うん。やっぱり、笑い声がいちばん、ね。

わたしはそのまま、少し硬くなったあいちゃんのからだ、パジャマの上からなでてみた。

肩に、腕に、おなかに、太ももに。ん。どこもきれいに筋肉ついてて、気持ちいいくらいだわ。

「こらあゝ、そないぺたぺたさわってると、あたしもやつたるで」

ふふふ。そんなこと言っちゃって。

「いいわよ」

「ほあゝ、言うたな？」

ぎく。なんか、雰囲気が変わるってことさっきなおったわ。なにを

「うりゃ」

え ！？

「ぷ あははは」

わたしのおなかの横、つん、ってつついてきた。

「おんぶちゃんの弱点や。わきの下は平気なくせに、もつと下が弱いんやもんな」

あ、また、つん、って

「なんでそんなこと、知って！ にゃあゝ」

「あははは。『にゃあゝ』が出た♡」

うゝっ！

「あはははは。いやゝ、前にみんなでお泊りやった

ことあるやる？ あんとき、夜中に目えさめてもう
たんで、その ちょいちよい、つと、な？」

『ちょいちよい』じゃ、ない！

「もつ！ あたしだつて、あいちちゃんの弱点、知って
るんだからね!!」

はあ、はあ あゝ、疲れた。なんで夜中にこない
疲れなあかんね。

ああ、おんぶちゃんも、とびらの方でせえせえ
やってるわ。ひさしぶりやから、お互い手かげんな
しやな、まったく。

「ゴホ、ゲホン！」

ん!?

「え〜っト もつ、いいかな?。」

「なんや、この声? とびらのむこっか??」

「も、ももちゃん!？」

「えへへ。Hello」

あたしも、とびらに近づいてはつきり聞いた。ま
さかと思たけど、ほんまにももちゃんや。

「い、いつからそこにおつたん?。」

「ん〜とネエ。いつからダト思つ?。」

な、なんや。思わせぶりに ああ、寒いんに、
汗かいてまっやんか。

「ちょつと待つて。なんでこんな時間にももちゃん
がいるの? わたし、ぜつたい誰も来ないと思つた
から。」

「エへへ。ソウ、ホントは学校なんだケド。」

昨日はづきちゃんがネ、この時間にいたラ、きつ
と面白いわヨつて」

はづきちゃんが?

ああっ!!

「つてことは、まさか はづきちゃん! どれみちゃ
ん!!」

パン! パンパン!!

あつちやあ やられたわ。居間のテーブルとイスのかげから、クラッカーの音といっしょに二人飛び出してきてるやん。

「ハッピー・バレンタインー！」

もう、なに言ったらええんか

「二人とも、だましたわね!！」

「わたしの誕生日なんだもの。このくらい楽しんだって、いいでしょ♡」

ふふふ、って うあ、はづきちゃんも言つなあ。

「た、楽しむって、なによ。わたしはなにも」

「にやあ♡♡」

あゝあ。合図もせんのに、とびらの向こうのともちちゃんまで、声そろえてるわ。

「こら、あたしらの負けやで。おんぶちゃん」

頭の先まで真っ赤になってつつむいてたおんぶちゃんの肩に、あたしが手え置いて言ったら、その手えにぎりながら、ちっちゃな声が聞こえてきた。

「せっかく、バレンタインにお泊りできると思ったのにい」

あゝあ。もう、本音ただ漏れやないか。まったく、しょおないなあ。

あたしは耳元で、こっそり言つた。

「またいつか、な？ そんなときはきつと」

もちよつと、抱きごこちよおなってるから♡」

—おしまい—

この本に関するお問い合わせは、奥付の住所、または電子メールにてお願い致します。

e-mail nyankoh@sake.st

ハンドルは、“猫好. K” もしくは“金井亭 猫好”です。

また、細々とながら情報ページを作っております。

酒処金井亭 うえぶ店

<http://sake.st/nyankoh/>

お目に止まりましたら、よろしくお願いいいたします。

追記：私の書く文は、条件付きですがコピー可です。コピーしたいなんていう奇特な方は、以下の三つの条件を守っていただければ、いくらでもして頂いて構いません。

1. 表紙を含む、すべての頁をコピーすること。
2. 表表紙から裏表紙までを一セットとし、各頁を分離したり、新たな頁を加えたりしないこと。
3. コピーに際して必要な、最小限の費用を越える金銭授受を伴わないこと。

奥付

発行 酒処 金井亭

発行日 2004年1月25日